

パレート行為理論再考

—非論理的行為の概念を手がかりとして—

赤坂真人

本稿の目的

I 『社会学大綱』の基本構造

社会学大綱の基本構造

行為理論の位置づけ

II バレートの行為理論

論理的行為

非論理的行為

行為の準拠枠組

パレート行為理論の戦略

III バレート行為理論再考

パレートの行為理論に内在する分析視角

結語

本稿の目的

ヴィルフレッド・パレートの大著『社会学大綱』の主題を一言で表現すれば、「人間行為のほとんどは非論理的である」ということに尽きるだろう。人間行為の非論理性という一見自明のことがらを強調することによって彼は何を訴えようとしたのか。本稿の目的はまず第一にこの事実の理論的な含意を明らかにすることにある。

彼が非論理的行為に注目するに至った直接的な契機は、周知の通り純粋経済学と呼ばれる彼の経済学的考察を完成させることにあった。純粋経済学は「最小の努力で最大の効用を得るために、目標に対して常に最適な選択をする」と仮定されるホモ・エコノミクスの行動によって生じる経済過程を分析するものであり、人々の欲望および選好

と、その充足に対する障害という要因にのみ立脚して構築された、きわめて分析的な経済学理論である。¹⁾ 一般に数理経済学と称される、経済システムを連立微分方程式で記述する理論体系は、まさに社会科学という名にふさわしい体裁を備えた新しい経済学の到来を予感させた。しかしながら、彼はやがてこの理論体系の説明力と予測力の限界を自覚するようになる。とりわけそれは政治的意志が関与するマクロ経済学や、その他さまざまな社会的要因が関与する応用経済学の問題に関して顕著であった。すなわち「純粋経済学は行為の理想状態を扱うわけで、その範囲内においてだけ有効であるにすぎない」のであり、²⁾ ゆえに「経験的現実においては、経済行為は経済的均衡とまったく同じく、単なる推論による理論的な解釈を妨げる障害に突き当たってしまうのである。³⁾ そこからパレートは、「経験的現実について完全に考えをめぐらすためには、相互依存に従って経済的事実を他の諸事実と相関関係にある社会的事実として考えることが不可欠である」との認識に至った。⁴⁾

こうして純粋経済学を補完するものとして社会学の研究を開始したのであるが、それは必然的に非論理的行為を分析の対象とすることになった。なぜなら論理的行為を前提として構築された純粋経済学理論の適用を阻むものは、論理的行為の範疇からこぼれ落ちた非論理的行為に他ならないからである。パーソンズによれば、このようなパレートの試みは経済学と社会学をより包括的な人

1) Freund, J., *PARETO, la théorie de l'équilibre*, Seghers, Paris, 1974. 『パレート—均—衡理論』小口信吉 板倉達文訳、文化書房博文社、1991年、48頁。

2) Freund, J., *ibid.*, 邦訳、50頁。

3) Freund, J., *ibid.*, 邦訳、46-47頁。

4) Freund, J., *ibid.*, 邦訳、49頁。

間行為の科学として、すなわち前者は「論理的行為の分析」を、後者は「非論理的行為とその帰結の分析」を課題とする科学として定式化せんとするものであった。⁵⁾

パレートに先立ち卓越した行為理論を展開したウェーバーと同様、パレートにとってもまた人間行為についての理論は、社会の形態の決定および社会で生起する運動についての総合的説明を行うための基礎作業という位置づけを与えられていた。⁶⁾ だがこの目的を達成するにあたってパレートがとった戦略は、人間行為の非論理性を軸に据えるという点できわめて特異なものであった。というのも彼の時代にあつて社会学の巨人たちの多くは、いずれも人間行為の合理性に注目していたと考えられるからである。⁷⁾ もちろんここでパレートが使用する非論理的という用語は、非合理的という用語と同じ内包をもつものではない。(本稿の脚注37参照)。

多くの理論家が人間行為の合理性を前提としたといっても、それは彼らが人間行為の非合理性を取るに足りぬものとして無視したことを意味するものではない。むしろ彼らを悩ましてきた問題のひとつは、理論において人間行為の合理性と非合理性をどのように位置づけるか、さらに言えば本質的に非合理的な人間行為がいかなるメカニズムによって合理的存在へ転化するのかという問題であったといっていだらう。彼らにとっては人間

行為の合理性こそが社会秩序を可能とする要因であり、非合理性はその攪乱要因でしかありえない。⁸⁾ これに対しパレートはあくまでも「人間行為の非論理性」を分析の焦点に据える。最初に述べたように本稿はこの戦略の理論的な意義を明らかにしようとするものである。この目標を達成するため、本稿はまず第一に『社会学大綱』の全体的構成を明らかにし、彼の行為理論がその中でどのような意義を持つのかについて検討する。次に彼の行為理論の中心的概念である「論理的行為」と「非論理的行為」の概念を、さらにはパレート版「行為の準拠枠組」ともいべき「ABCスキーマ」を整理要約し、若干の解釈を試みる。そして最後にこの行為理論がどのような理論的射程を持つものであるかを明らかにしよう。

I 『社会学大綱』の基本構造

社会学大綱の基本構造

すでに述べたように、本稿はヴィルフレッド・パレートの行為理論に焦点を定める。だが彼の行為理論の諸側面を具体的に取り上げる前に、本稿が主なテキストとして準拠する『社会学大綱』の全体的構成を明らかにし、その中で彼の行為に関する考察がどのような意義を持つのかを明らかにしておいたほうが良いであろう。もちろん1800頁を超える大著『社会学大綱』をわずか数頁で要約

5) Parsons, T., *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, The Free Press, 1977. T. パーソンズ『社会学体系と行為理論の展開』田野崎昭夫監訳、誠心書房、1992年、28頁。

6) Pareto, V., *Trattato di Sociologia Generale* : G. Barbéra, 1916. (*The Mind and Society. A Treatise on General Sociology.*, Translated by Andrew Bongiorno and Arthur Livingston, 1935.), § 145.

7) とりわけ近代を「知的または事実的な全面的合理化」の進展としてとらえたウェーバー (Weber M., *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1, Vorbemerkung, 1921. M. ウェーバー『宗教社会学論集』大塚久雄 生松敬三訳、みすず書房、1973年)、そして彼の強力な影響のもとに行為理論を体系化した T. パーソンズにはこの傾向が強く見られる (Sica, A., *Weber, Irrationality and Social Order*, Berkley : University of California Press, 1988, Chapter 1 参照)。

8) 合理的行為が有効であり、かつ合理的行為を前提とする分析が有効であるのは、行為者と関わる他のすべての他者もまた合理的に行為すると想定される状況においてのみである。(Schutz, A., *Collected Papers II*, Martinus Nijhoff, 1964, p. 80) もし行為者が合理的に行為したとしても、他の行為者が非合理的に行為したとすれば両者の行為はかみ合わず、合理的行為によって獲得されるメリットは消え失せてしまうだろう。すべての成員が合理的に行為すると想定される状況としては、きわめて凝集性が高くかつ統合された営利組織や軍隊、および厳密に規定されたルールのもとで遂行されるゲームやスポーツが挙げられよう。これらの状況に共通することは、個々の行為がひとつの目的に向けて合理的に関連づけられた「合理的行為のシステム」が形成されているということである。もちろんこのシステムが円滑に作動するためには、個々の成員の行為がこの合理的システムの枠から逸脱しないように動機づけ、かつ外面的に統制することが必要である。このような合理的な行為システムの制度化と、そのシステムに対する行為者の同調の動機づけ、およびそのシステムからの逸脱と統制の分析がパーソンズの社会システム論の中心的課題であることは言うまでもない。

するのは不可能であり、そのアウトラインを示すにすぎないが、それでも論旨の流れを把握することが著しく困難な本書の基本的構造を整理しておくことは有益なことであると思われる。

本書を構成する各章は以下のような標題を持っている。

- 第一章 前おき
- 第二章 非論理的行為
- 第三章 学説史における非論理的行為
- 第四章 経験を超越する理論
- 第五章 疑似科学的理論
- 第六章—第八章 残基
- 第九章—十章 派生
- 第十一章 残基と派生の諸属性
- 第十二章 社会の一般的形態
- 第十三章 歴史における社会均衡

我が国におけるパレート研究において卓越した業績を残している松嶋敦茂によれば、同書は大きく二つ（または四つ）の部分に分けられる。すなわち第一章が予備的な方法論的考察であり、二章から五章までが本書の帰納的部分である。そして続く第六章から十二章までが演繹的部分にあたり、最終章がここまで帰納—演繹されてきた理論の歴史的検証にあたるとしている。⁹⁾ 以下各章を全体的な構成に留意しながら簡単に要約してみることしよう。

まず第一章ではパレートの方法論的立場である「論理—実験的」方法についての詳細な考察が展開される。基本的に自然科学の方法をモデルとするこの「論理—実験的」方法は、単に彼の科学哲学上の立場を示すのみならず、第三章—五章において認識の非論理性を検討する際の、さらには本

書全体を貫く方法論的規準となっていることに留意せねばならない。¹⁰⁾

「非論理的行為」という標題を与えられた第二章は、本書の帰納的部分である第二—五章において中心的な位置を占める。ここではまず人間行為のほとんどは非論理的であることが宣言される。そして非論理的行為の定義と分類が示された後、非論理的行為の準拠枠組たる「ABC 図式」が呈示される。この図式については本稿第二章で詳細に検討するが、すでにこの時点で行為と結びついた理論 C に相対的に恒常的な要素と可変的な要素が含まれているという、後の残基と派生を区分する論理が用いられていることに留意しよう。¹¹⁾

以下第三章から五章まで、第二章で呈示された図式のうち「心的状態の言語的表象」とされる「理論 C」に焦点が定められ、人々の行動を正当化し、一般の感情に訴えることによって他者の支持を得ようとする意見、信念、イデオロギー、哲学および物語¹²⁾についての分析が展開される。まず「学説史における非論理的行為」という標題を与えられた第三章では、アリストテレス、プラトン、ソクラテス、トマス・アキナス、H. スペンサー、A. コント、J. S. ミル、啓蒙主義者等の言説が俎上に載せられ、それらの非論理性、すなわち形而上学的性質、価値評価の性質、相互依存関係と因果関係との取り違え、論理的推論の誤りなどが暴露される。¹³⁾ そして本章の後半部ではこれらの言説に見出される、本来は非論理的行為であることを論理的に見せかけるさまざまな技法が分析される。¹⁴⁾

続く第四章では「経験を超越する理論」の標題のもと、経験的検証が不可能な形而上学的命題の批判が展開され、¹⁵⁾ さらにこの批判に基づいて社会科学における理論のありかたが論じられる。それ

9) 松嶋敦茂『経済から社会へ—パレートの生涯と思想—』みすず書房、1985年、70—72頁。

10) 「論理—実験的」と呼ばれるパレートの実証主義的方法論に関しては赤坂真人「社会システム論の系譜 (IV) —ヘンダーソンとパーソンズ；パレートの方法論をめぐる—」関西学院大学社会学部紀要、第73号、1995年を参照。

11) Pareto, V., op. cit., § 189, § 217, § 218.

12) Pareto, V., ibid., § 1397.

13) Pareto, V., ibid., § § 270—304.

14) Pareto, V., ibid., § § 307—356.

15) パレートがこのような命題の典型として槍玉に挙げるのが「自然法」である。それは正しい理性の原則、自然における普遍的原理、神聖な意志などという表現を与えられ、古代から中世、そして近世に至るまで社会規範の妥当性の根拠とされてきたものであるが、その実質は社会および人間に関して人々が信奉する価値観を形而上学的

らは第一章で展開された議論と同様、科学哲学上のさまざまな論点に言及するものであるが、最終的に①「社会科学の命題は経験と観察から論理的に帰納され、かつ経験的に検証可能な命題であらねばならない」、②「それが不可能な形而上学的命題について科学はどのような判断も下せない」という二つの命題に集約されるだろう。¹⁶⁾ 社会科学方法論に言及した後、パレートは命題を①記述的命題、②実験的斉一性を主張する命題、③実験的斉一性に何かを付け加えるかまたはそれらを無視する命題の三つに分類し、このうち第一種と第二種の命題が科学的命題であり、第三種の命題は非論理的行為の規範となる非科学的命題であると規定する。そしてさらに第三種の命題を「非実験的要素が明確に導入されている命題グループA」と「非実験的要素の導入が不明瞭で、論理的な内実を持たないにもかかわらず、論理的粉飾を加えることによってあたかも論理的であるかのようにみせかける命題グループB」に分類し、第四章では前者の、続く第五章では後者の命題に関する詳細

な分析を展開する。¹⁷⁾

そして非論理的行為と結びついた非科学的または科学外的理論を分析した結果、彼は「われわれがcと表記する具体的理論には、相対的に安定しており、われわれの感情の表現と考えられるaという要素と、全体としてかなり可変的かつ偶然的で、上記の要素aを説明し誘導する論理であるbという要素を含んでいる」という結論に達する。¹⁸⁾ ここでこの理論cと称される科学外的理論こそ第六章以下で分析される「派生体」にほかならない。そしてその中に含まれる要素aおよびbというのがそれぞれ「感情の表現(=残基)」と「論理的推論、誤謬、詭弁(=派生)」なのである。¹⁹⁾ こうしてパレートは約500頁を費やして、ようやく社会システムを分析するもっとも重要なツールである「残基」と「派生」という概念の内包を定式化し、次の第六章から十章においてそれぞれの外延を特殊化してゆくのである。

まず第六章-八章では多種多様な非論理的行為の分析を通して「残基」が抽出され分類される。

に展開したものにすぎない。もちろん社会の統合にとってこれらの評価的信念は決定的に重要な役割を果たす。だがそのような形而上学的、評価的信念に対して科学はいかなる判断をも下しえない。にもかかわらずそれらの信念は、あたかも経験的に妥当な根拠をもつかのごとく主張されている。そしてその例証としてパレートはアリストテレスからエピクリス、パウロ、キケロ、グロチウス、ブーヘンドルフ、トマス・アキナス、ビュルラマキ、バッテル、ホップス、ロック、ルソーに至る思想家たちの自然法理論を挙げ、その曖昧さ、論理的矛盾、検証不可能性、価値の前提などを告発する。(Pareto, V., *ibid.*, § 401-466.)

- 16) これらの議論をとおりパレートは、論理-実験的、すなわち科学的信念と、経験的検証が不可能な形而上学的信念との峻別を訴える。だがここでパレートは非経験的な信念と価値評価的信念、さらには感情の問題を明確に区別せぬまま論じてしまうことから無用な混乱を生じさせている。議論を明確にするためには、[感情中立的-感情的] [経験的-非経験的] [没価値的-価値評価的] という三つの次元を区別すべきであった。
- 17) これらの分析においては、特に神話や歴史物語の解釈に関する恣意性と非経験性が告発される。それは解釈に関する方法論的批判といった外観を呈するが、加えて彼はアトミズム、トーテミズムに関する理論、A. コント、H. スペンサーの進化論、さらには神話や慣習についての進化論的および伝播論的解釈を批判し、それに代えて構造主義的解釈ともいうべきものを呈示する。例えば古代ローマでヴェスタの神に使用した女性たち、ペルーで太陽の神に使用した女性たち、そして伊勢神宮の斎王などに看取されるように、「神に仕える女性は処女でなければならない」という規範が広く存在する。すなわち世界には時間空間を異にしながらも、類似した構造をもつ神話や物語、風習が数多く見出される。パレートによれば、その類似性はそれらの事象が人間精神の進化におけるある段階で必然的に生じるものであることに由来するとか、伝播による模倣の結果生じたものであるとかいった推論にはどのような証拠も提示しえない。ゆえにそれらの類似性は「根底にあるひとつの感情が、異なった表現形態で現われた」結果生じたと考えるべきであると主張する。(Pareto, V., *ibid.*, § 743-747.) この構造主義的な説明そのものが残基と派生の例証となっていることに留意しよう。
- 18) Pareto, V., *ibid.*, § 798. これらはすでに『社会学大綱』§ 217, § 306, § 514で示唆されていた。それぞれの要素を具体的に理解するにはパレートの次の例が分かりやすい。「例えば次のような原理がある。またはもしお望みなら感情があると言ってもよいであろう。すなわちある数が崇拜されるに値するという感情が存在する。これが、われわれがさらに研究してみようと思っている、事象の主要な要素aである。(§ 960f) しかし人間は単にそのような感情と数字を結びつけるだけでは満足しない。彼はまたいかにしてそのような事が生じるのかを「説明」したいと望み、かつ論理の力によってそれを証明したいと考える。そこでbの要素が侵入し、結果として、なぜある数が神聖であるのかについて、われわれはさまざまな「説明」や「証明」を有することになる。」(Pareto, V., *ibid.*, § 799.)
- 19) Pareto, V., *ibid.*, § 803, § 868.

残基とは行為と結びついているさまざまな理論、すなわち行為者の本能、感情、性向、欲望などを表わす言語的表象(=派生体)から抽象化された、「人間行動および感情の不変的な傾向性」というべきものである。この残基を抽出するにあたってパレートは次のような方法を用いる。

人間行為を理解するためにはそれを生じさせた直接の原因と考えられる「行為者の心的状態A(感情や潜在意識など)」を把握する必要がある。だが他者の心的状態を直接に知ることは不可能である。それゆえわれわれは「行動B」と「心的状態の言語的表象C」を通して、これを間接的に推定せねばならない。パレートはこれらのうち「心的状態の言語的表象C」に着目して次のような分析を開始する。²⁰⁾「まず最初に行為の論理的要素を捨象し、非論理的要素を分離する。次に、非論理的行為のうちから顕示的行為B...を捨象し、非論理的行為に含まれる言語的表出あるいは理論のみを分離する。」²¹⁾そして「これらの理論は、論理-実験的科学的の規準に従って批判的に分析され、そこに含まれている要素のうち、その要素に一致するものは取り除かれる。そして残った要素はさらに定数と変数とに分解される。」²²⁾パレートは無数の表象、理論、行動の奇異な形態、宗教的崇拜の様式、魔法や魔術といった事象に上記の操作を繰り返し、残基を帰納的に抽象化してゆく。²³⁾

ところですでに述べたように、この心的状態の

言語的表現C(=理論)には比較的变化しにくい部分、すなわち「残基」と比較的变化しやすい部分が含まれている。後者の可変的要素は「派生(誘導論理)」と呼ばれ、残基によって表現される本能的行動傾性や感情を説明し演繹して、それらを自明的真理として人々に受容せしめるための論理(疑似論理およびレトリック)を指す。²⁴⁾第九章-十章では、今述べたところの「派生(誘導論理)」が分析され、抽出されるのであるが、ここで「派生」と「派生体」を混同しないように注意せねばならない。派生体は非論理的行為と結びついている「心的状態の言語表現C(=理論)」そのものであり、派生は残基と同様、派生体に含まれる要素として位置づけられる。

以上のように残基と派生を論理-実験的な方法に従って抽象化し分類した後、パレートは残基の一種と考えられるが、論理的行為である経済的行為の主要な動因となるという理由で「利益」を残基から区別し、これを社会システムを構成する要素の列に加える。そして十一章では、これらの①残基 ②利益 ③派生に第四の要素として「社会の異質性」と「エリートの周流」を加え、続く十二章でいよいよこれらの要素間の作用と反作用の総体として概念化された「社会システム」の均衡を分析する。ここではさまざまな具体的事象に基づいて、「社会的効用」、「社会における暴力の使用」、「投機家と金利生活者」、「相互依存関係の循

20) ここでパレートが「行動」ではなく「心的状態の言語的表象」に着目する理由について、パーソンズは「行動」よりも「心的状態の言語的表象」のほうが「心的状態」と独立に変化する可能性が低いこと、従って「心的状態」のより正確な指標となることを挙げている。(Parsons, T., *The Structure of Social Action*, McGraw-Hill ed. 1937. T. パーソンズ『社会的行為の構造』稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳、木鐸社、1976~1989年、第二巻、100頁)。

21) Parsons, T., *ibid*, 邦訳、第二巻、103頁。

22) Parsons, T., *ibid*, 邦訳、第二巻、109頁。このうち定数が「残基」なのであるが、この残基という名称には「言語的表現から可変的要素を取り除いた結果、後に残されたもの」という意味が込められている。(松嶋敦茂、前掲書、72頁)。

23) パレートが分類した六種類の残基は次のようなものである。Ⅰ結合の本能：事物ないし概念のあいだに何らかの種類の関係を想定し、そこから一定の帰結を引きだそうとする人間の傾向性。Ⅱ集合体の維持：確立された結合を維持し、変化を拒絶し、命令を忠実に受入れようとする人間の傾向性。Ⅲ外的行為で感情を表現しようとする欲求：文字どおり手振りや身振りといったノン・ヴァーバルな記号で感情を表現しようとする人間の傾向性。Ⅳ社交性と関連する残基：ある結社を自発的に創ろうとする傾向、人々に自分と同じ思考や信念、行為の様式を押しつけようとする傾向、優越者に服従・依存し、劣等者を支配・庇護しようとする傾向といった共同生活を維持、強化する機能を果たす人間行動の傾向性。Ⅴ個人の統一性とその従属物の保全：人々の身体的・精神的均衡および社会的均衡が攪乱された場合、何らかの操作によってもとの均衡状態を回復しようとする傾向性。Ⅵ性的残基：性的本能によって駆動される人間行動のさまざまな傾向性。

24) パレートは「派生」として1.断言2.権威への訴求3.感情、個人・集団の利益への訴求、法的・形而上学的・超自然的実体への訴求4.言葉による証明(レトリック)の四つを挙げる。

環」、「統治階級と被統治階級の力学」、社会現象の「波動的展開」といった問題が分析されるが、それはJ. シュンペーターが形容したように「政治過程の社会学」といった様相を呈している。²⁵⁾ そして最終章では、古代ギリシャから20世紀に至るまでの多種多様な歴史的事件をデータとして、第二章から第十一章において展開されてきたさまざまな理論が経験的に検討される。松嶋によれば、それはパレート理論の経験的な追検証であるとともに、彼の歴史観の表明であり、時代診断でもあった。²⁶⁾

行為理論の位置づけ

それでは次に『社会学大綱』の前半で展開される、人間行為に関するさまざまな考察が本書の中でどのような意義を持つのかについて検討しよう。

まず第一にウェーバーやパーソンズの行為理論を念頭に置いた場合、パレートのそれは彼らの理論と同様に学問的な意味での準拠枠組として、すなわち社会学の学問的対象を規定する規準として機能すると考えられる。本稿の冒頭で述べたようにパレートにおける論理的行為と非論理的行為の区分は、基本的に経済学と社会学をより包括的な人間行為の科学として定式化する意義を担うものであった。ゆえにこれによって社会学の学問的対象が明確に確定され、逆に経済的行為を生じさせる「論理的行為」、ウェーバーでいうなら「目的合理的行為」は社会学の研究領域から排除されることになった。

第二にそれは具体的な行為を分析するための主要な準拠枠組を与える。とりわけパレートが非論理的行為を分析するために展開した行為の準拠枠組とも言うべき「ABC 図式」は、非論理的行為の分析にあたってどのような要素に注目し、どのような要素を無視するかについての重要な規準となっている。さらに「残基」と「派生」の理論が

展開される「abc フレーム」は、上記の図式とは別のものと考えなければならないが、基本的にはこの「ABC 図式」を土台として構成されている。この非論理的行為の分析から導かれた「残基」と「派生」の理論は、実質的にパレート理論の中核を形成するものであって、これなしに社会システムの分析は不可能である。すなわち本書に関する上述のアウトラインで述べたように、社会システムは「残基」と「派生」および（論理的行為を導くという理由で残基とは区別された）「利益」、そして「社会の異質性」と「エリートの周流」といった諸要素の相互依存の総体として概念化されるわけであるが、「社会の異質性」と「エリートの周流」の理論は、実質的に残基と派生の理論に基礎づけられているものであることを考えれば、²⁷⁾ 人間行為についての理論的考察は、パレートが第二章の出発点で述べたように「究極的に社会の形態の決定、および社会で生起する運動についての総合的説明を行うための基礎作業」としての地位を占めると言えるだろう。²⁸⁾ 本書の前半部で展開される行為理論の究極の目的は、「残基」と「派生」の概念を導くことにあると言っても決して過言ではない。

II パレートの行為理論

このような位置づけを与えられた行為理論が、まず論理的行為の定義から開始されるのは、繰り返し述べてきたように社会学の対象たる非論理的行為を残余範疇として規定するためであった。すなわちパーソンズの言葉を借りるなら「経済理論によって無視されている行為の幾つかの要素を定義し、観察し、分類し、体系的に接近するための手がかりを作ること」、換言すれば「重要な非経済的要素の少なくとも幾つかを取り出すこと」を目的とするものであった。²⁹⁾

25) 松嶋敦茂、前掲書、74頁。

26) 松嶋敦茂、前掲書、74-75頁。

27) 新明正道『社会学的機能主義』誠信書房、1967年、309頁。例えば個人に存在する第一種の残基と第二種の残基の割合がエリートの種類を決定すると考えられているし、エリートと大衆に存在する残基の分布が社会の秩序と変動を規定する決定的に重要な要因として考えられている。

28) Pareto, V., op. cit., § 149.

29) Parsons, T., op. cit., 邦訳、第二巻、88頁。

論理的行為

それでは「論理的行為」とはいかなる行為であるか。次に少し長くなるが「論理的行為」についての最も完全な定式化が与えられている『社会学大綱』§150の全文を引用してみよう。

「目的に対して適切な手段が用いられており、かつその手段が目的と論理的に結びつけられている行為が存在する。また行為の中にはこれらの性格が欠如しているものもある。これら二種類の行為は客観的な側面で考えられるか、それとも主観的な側面で考えられるかに応じてまったく異なったものとなる。主観的な観点からすればほとんどの人間行為は論理的行為の類型に属する。ギリシャ人水夫の目にはポセイドンに人身御供を献げるのも、櫓を漕ぐのも等しく航海の論理的手段と映った。煩わしく混乱させるだけの饒舌を避けるために、これら二種類の行為に名前を与えるのが良からう。その行為を遂行する主体の観点からのみならず、より豊かな知識を持っている人々から見ても、その行為がその目的に対して論理的に結びつけられている行為、換言すれば、主観的にも客観的にもいま説明した意味で論理的な行為を論理的行為と名づけよう。他の行為は非論理的行為と呼ぶことにしよう。(非論理的ということは決して反論理ということの意味するものではない)。³⁰⁾

この定義に次節で述べられる非論理的行為の類型に関する議論を補足して、論理的行為の特徴を整理すると次のようになる。論理的行為は次の三つの要件を満たすものでなければならない。①目的に対する手段の適合性を行為主体が明確に自覚している。②目的に対する手段の適合性が経験科学の知識に照して妥当であると判断される。③主観的目的が客観的目的と一致する。すなわち論理的行為とは、行為者の目的と、その実現にむけて彼が選択した手段との関係が科学的知識に照らし合わせてみて適合的であると判断され、かつまた行

為者自身もそのことを明確に意識しており、さらに行為者がある手段を遂行することによって成就されると予想する将来の事態(=主観的目的)と、その手段の遂行によって実際に生じる結果(=客観的目的)とが一致する限りでの行為である。³¹⁾

非論理的行為

以上のような論理的行為の定義に基づいて、次に非論理的行為が残余範疇として定義される。すなわち論理的行為以外の一切の行為として規定される。ここで非論理的(non-logical)とは、松嶋が指摘しているように行為が論理的規範以外のものに依拠して遂行されるということの意味しており、必ずしも三段論法のような推論の法則に反しているという意味での反論理性(illogicality)を意味するものではない。³²⁾ それは論理的行為が満たさねばならない要件を欠くもの、すなわち①行為者が目的-手段に関する因果連鎖を認識、自覚しておらず、②自覚しているとしても客観的な観点(科学的観点)から見た場合、その適合性が妥当なものとは判断されえず、③かつまた行為者が選択し遂行した行為によっては、それによって成就すると予想された事態が達成されない場合の行為である。

以上のような非論理的行為をパレートは「客観的目的が含まれているか否か」、および「主観的目的が含まれているか否か」という二つの軸を組み合わせることによって四つに分類する。³³⁾ ここで客観的目的は、上述のとおり「ある手段の遂行によって実際に生じる結果」を、主観的目的は「行為者自身の主観において、ある手段を採用することによって成就されると想像されている将来の事態」を指すものとする。

第一種の非論理的行為の典型は「儀礼と慣習に従って遂行される多くの行為」である。³⁴⁾ この場合、行為者の脳裏には手段-目的関係はもとよ

30) Pareto, V., op. cit., § 150.

31) Aron, R., *Main Currents in Sociological Thought II*, Basic Books Inc., 1967. レイモン・アロン『社会学的思想の流れII』北川隆吉・宮島喬・川崎嘉元・帯刀治訳、法政大学出版局、1984年。Parsons, op. cit., 1937, 邦訳、第二巻、90-92頁。松嶋敦茂、前掲書、304頁。

32) 松嶋敦茂、前掲書、305頁。

33) Pareto, V., op. cit., § 151.

34) Pareto, V., *ibid.*, § 154.

| | 客観的目的 | 主観的目的 |
|-----|-------|-------|
| 第1種 | なし | なし |
| 第2種 | なし | あり |
| 第3種 | あり | なし |
| 第4種 | あり | あり |

表1 非論理的行為の分類

り、目的そのものさえ描かれてはいない。この種の行為の典型としてはタブーが挙げられよう。例えばインセスト・タブーはその客観的目的も確かなことは分っていないし、主観的にも「ただそうしてはいけない」と感じているだけで、その行為が禁止される理由については何も自覚されていない。

第二種の非論理的行為は無知や誤謬に基づく行為であり、航海の安全を願ってポセイドンにいけにえを捧げるような呪術的行為がその典型である。この場合、行為者の主観においては目的と手段の適合性が存在するのであるが、その適合性は決して客観的な観点から、すなわち科学的観点からは検証されえない。一般に多くの儀礼的行為は、人々が盲目的にその儀礼が要求する行動パターンに従っている限りは第一種の非論理的行為であると言えるが、³⁵⁾ それらの行為に何らかの

もっともらしい意味づけがなされると、たちまち第二種の非論理的行為へ転化すると考えられる。³⁶⁾

第三種の非論理的行為は客観的観点、すなわち科学的観察者の視点からすれば、経験的に検証可能な手段-目的間の適合性が存在しているのであるが、行為者自身の主観においてはそのような因果連関が想定されていない場合の行為である。パレトはそれを「習慣に従って本能的かつ機械的に遂行されている」多くの人間行為であるとして、³⁷⁾ 動物における本能的行為をその純粹型としている。すなわち動物たちは個体と種の保存に適合的な行動を取るが、それは決して推論によるものではなく、身体に先天的に組込まれている本能によるものである。³⁸⁾ 人間の場合を考えて見ると、いわゆる「反射的行動」がそれにあたる。例えば目にゴミが入りそうになったので反射的にまぶたを閉じるという行動は、客観的な観点からした場合、論理的な反応であるが、本人の主観においてはそのような手段-目的間の関係は自覚されていない。³⁹⁾

最後に第四種の非論理的行為とは、行為者の主観において想像されている目的-手段関係は決して非論理-実験的なものではなく、それを遂行す

35) Pareto, V., *ibid.*, § 160.36) Pareto, V., *ibid.*, § 160, § 180.37) Pareto, V., *ibid.*, § 157.38) Pareto, V., *ibid.*, § § 155-§ 157.

39) ウェーバーの行為概念を念頭に置いた場合、まず第一種と第三種の非論理的行為のような主観的目的を欠いた行為、すなわち行為者の主観的意味を欠いた行為が、社会学の分析対象となりうるかという問題が生じる。第一種の「儀礼と慣習によって遂行される」行為は、ウェーバー自身が主観的意味の理解という方法が適用しえないことも多いと言明する「伝統的行為」のように、極限的なケースとして範疇化することも可能であろう。しかし反射的行動や本能的行動を含む第三種の行為については、文字どおり「行動」と呼ばれるべきであって行為の範疇には入れるべきではなからう。

ところで第一種と第三種の非論理的行為の定義から「合理的であること」とパレトが言う意味での「論理的であること」に関する差異が明かとなる。まず注目すべきことは、これらの非論理的行為は必ずしも非合理的行為であるとは限らないという点である。すなわちパーソンズが指摘するように、われわれは日常生活においてそこに込められた意味や効率性を自覚することなく、常識的な意味で「合理的」な多くの行為を自動的に遂行している。自動的とは「行為の一つ一つの段階で、次の段階が目的に対する手段として適当かどうかをその都度考えず」に行為することを意味するのであるが (Parsons, T., *op. cit.*, 邦訳、第二巻、90頁)、このことは特に目的と手段がきわめて合理的に結びつけられている制度的行為を習慣的に遂行している場合にあてはまる。パレトの定義に従えば、このような目的-手段間の適合性が自覚されない行為は非論理的であると判断されるのであるが、それらは決して「非合理的行為」ではありえない。すなわち合理的であるか否かは、行為者がそれを自覚しているかどうかとは関係がない。極端な場合、他者の侮辱に対する立腹といった感情的反応でさえ「非合理的」とは判断されないであろう。なぜならわれわれはその反応をわれわれの理性の光に照して「妥当なもの」と感じるからであり、そもそも「合理的」という用語が目的に対する手段の「効率性」といった意味のみならず、「道理にかなった」「理性の光に照して妥当であると判断される」といった、より一般的な意味を内包として含むからである。

ることによって何らかの結果が生じるのであるが、その結果（＝客観的目的）が、当初行為者がその手段を遂行することによって達成されると想像していた事態（＝主観的目的）と一致しない場合の行為を指す。従ってこの場合、行為者は目的－手段に関する正しい論理的推論に従って行為しているつもりでいるのだが、その目的は彼が想定している因果連鎖によっては決して達成されえない。例えば、パレートによれば自由競争下にある資本家は、商品の価格を下げ商品の販売を促進すべく賃金カットといったコスト削減案を採用するが、それは明らかに非論理的の行為であるという。なぜならコストを削減して価格を下げても、すぐに競合する企業が価格を下げ、値下げの実質的な効果は失われてしまうからである。（しかしこれが市場を独占している場合なら、この行為は販売促進を目的とするきわめて論理的な行為となる）。⁴⁰⁾

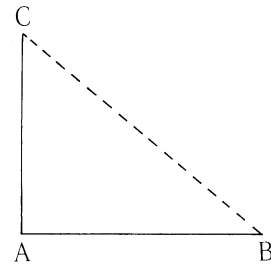
以上四つの非論理的の行為を検討してみれば、第一種および第二種の非論理的の行為が非論理的の行為①の規準と、第三種の非論理的の行為は②の規準と、そして第四種の非論理的の行為は③の規準と関連していることがわかるだろう。

行為の準拠枠組

パレートは第二章で論理的の行為と非論理的の行為

を定義した後、非論理的の行為を分析するための準拠枠組ともいべきものを呈示する。この枠組は有名な三角形で示されるのであるが、それは何よりも具体的行為の分析において注目すべき要素をえり分ける規準として機能するものである。次にこの図式の基本構造を示そう。⁴¹⁾

図1 行為の準拠枠組（ABC図式）



A：表象と行為から推論される心的状態
B：外側から観察可能な行為
C：行為者のさまざまな言語的表象

例えばここで行為者の心的状態 A を「殺人行為に対する恐怖心」、感情の表現 C を「神が殺人行為を罰するという理論」、行動 B を「殺人の抑止」としよう。その場合「人を殺すことに対する恐怖心が殺人を思い止まらせる」というのが「A → B」である。それに対し「人を殺すことに対する恐怖心 A」が「神は殺人行為を罰するという理論

40) Pareto, V., *ibid.*, § 159. ここで次の点が問題となる。すなわち第四種の非論理的の行為と結びついている理論は必ずしも非論理－実験的ではないということである。すでに述べたように第四種の非論理的の行為が非論理的と判断されるのは、それを導く規範が非論理－実験的であるからではなく、行為者がある手段によって達成されると考えている状態と、その手段を遂行することによって実際に達成される状態とが一致しないがゆえであった。行為を導く規範が論理－実験的であるにもかかわらず、なぜ非論理的の行為となるのか。以下この点について考察してみよう。

第二種と第四種の非論理的の行為は一見異なったもののように見えるが、双方とも行為者が選択した手段によっては、彼がそれによって成就されると考えている状態を実現できないという点では同じである。それではなぜ実現が不可能であるのかと言えば、まず第二種の行為は直接的な目的に対する手段の選択が不適切であるがゆえに目的を達成することができない。例えば「ポセイドンの神に人身御供を献げる」という行為は、航海の安全という目的を確実に達成する手段とはなりえない。これに対し第四種の非論理的の行為は、松嶋敦茂の言葉で言えば「自らが採用した手段の総波及効果を行為者が正確に把握しえない」がゆえに目的を成就できないのである。例えば自由競争下にある資本家が採用する、「商品の価格を下げるための賃金カットといったコスト削減案」が結局商品の販売促進にはつながらず非論理的となってしまうのは、資本家が「賃金カットによるコスト削減」という手段が生じさせる総効果の「マクロ的分析」を行えなかったためである。（松嶋島敦茂、前掲書、326頁）。しかしながら今述べたような意味で、システムのある要因が生じさせる総波及効果を認識しえる行為者がどれだけのいるのだろうか。行為が論理的であるためには、第二種の非論理的の行為のように単位行為の目的－手段関係の適合性といったミクロなレベルでの論理－実験的認識のみならず、ある手段がシステム全体に及ぼす総効果の把握というマクロなレベルでの認識が必要であるとすると、卓越した知識と洞察力を持つ経済学者でさえ、しばしば経済政策の総波及効果に関するマクロ的な分析を誤ることを考えれば、パレートのいう論理的の行為なる概念は成立しがたいものと思われてくる。（Aron, R., *op. cit.*, 邦訳、142頁および Zeitlin, I., *op. cit.*, p. 180. 参照）。

41) Pareto, V., *ibid.*, § 162-164, § 267-269.

C」を生じさせ、ゆえに「殺人を思い止まるB」という行為のコースを辿る場合は「A→C→B」となる。パレートにとって問題と感ぜられるのは、多くの場合「殺人に対する恐怖心」という心的状態が行動の真の原因であるのに、人々が「神が殺人を罰する」といった事後的な論理を捏造し、それを行動の真の原因だと信じてしまうことにある。⁴²⁾

アロンによれば、『社会学大綱』の前半は「AとB・Cとの関係、またはA・CとBとの関係、さらにはこれらの関係についての循環論的分析」がなかりの部分を含んでいる。⁴³⁾ この中でまず基本となるのがAによるCとBの決定である。パレートによれば、われわれはある精神状態Aに駆り立てられて行動Bを行うのであるが、われわれは行動Bの遂行に対してまことしやかな説明を加えようとする本質的な傾向を持つ。その結果、われわれはしばしばこの理論に欺かれ、AではなくCを行動の真の原因であると見誤ってしまう。しかしながら理論Cが行動Bに一定の影響を与えることも看過することのできない事実である。まことしやかに捏造されたイデオロギー的言説がひとたび外在化され共有されると、それは創り手のもとを離れ、今度は逆に動かしがたい自明の前提として我々を拘束し始めることはよく知られた事実である。さらにBがA・Cに影響を与えることも考えられる。⁴⁴⁾ 例えば「地位が人をつくる」という諺に象徴されるように、ある役割行動の反復は、やがてその役割行動を正当化する言説や態度を生み出すものである。

非論理的行為の構造：残基と派生

第二章で上記の図式を呈示した後、パレートは続く第三章から第五章にかけてさまざまなタイプの科学外的理論の分析を行う。そして疑似科学的理論と題された第五章で「非実験的要素の導入が不明瞭で、論理的な内実を持たないにもかかわらず、論理的粉飾を加えることによってあたかも論

理的であるかのようにみせかける命題」を取りあげ、そこから行為の準拠枠組としての「ABC図式」と類似した、科学外的理論の内部構造を示す「abcフレーム」を呈示し、それに基づいて「残基」と「派生」を定義する。⁴⁵⁾

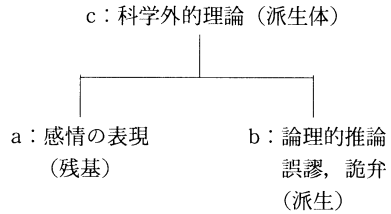


図2 科学外的理論の内部構造

ここで非論理的行為の準拠枠組たる「ABC図式」と科学外的理論の内部構造を示す「abcフレーム」を混同しないように注意せねばならない。パーソンズが指摘するように初期のパレート研究者のほとんどが、前者の「A: 心的状態」と後者の「a: 残基」とを、さらに前者の「C: 心的状態の言語的表象」と後者の「b: 派生」とを混同する過ちを犯した。⁴⁶⁾

後者の「abcフレーム」は科学的理論の内部構造の区分「A: 実験的原理・記述・断言、B: 論理的推論・事実的要素、C: 科学的理論」を非科学的または科学外的理論に適用したもので、先の非論理的行為の準拠枠組とは別のものであると考えなければならない。恐らくこの混同は非論理的行為の準拠枠組(ABC図式)の「C: 心的状態の言語的表象」と科学外的理論の内部構造を示すabcフレームの「c: 科学外的理論 (=派生体)」が実質的に同じものを指しており、⁴⁷⁾ しかも科学のおよび科学外的理論の構成要素[A, a]と[B, b]を区別するに際し「恒常的要素」と「可变的要素」という、すでに「ABC図式」で示唆された規準が用いられていることから生じたものと思われる。

42) Pareto, V., *ibid.*, § 163.

43) Aron, R., *op. cit.*, 邦訳, 156頁。

44) 循環的分析の具体的事例については Pareto, V., *ibid.*, § 165-168, § 268. を見よ。

45) Pareto, V., *ibid.*, § 803, § 868.

46) Parsons, T., *op. cit.*, 邦訳, 第二巻, 107頁。

47) Parsons, T., *ibid.*, 邦訳, 第二巻, 107頁, 脚注。

パレート行為理論の戦略

ここまでパレートの行為理論の中心概念である「論理的行為」「非論理的行為」「ABC スキーマ」「残基と派生」についての要約と若干の解釈を示した。最後に本章のしめくりとして、パレートの行為理論の戦略を総括しておくことにしよう。以下の要約は第一章で試みた『社会学大綱』の要約と若干重複するかもしれないが、パレートの行為理論に関するより明確な理解を可能にすると思われる。

1. 人間は論理ではなく感情によって駆動される。(§ 13, § 442, § 514-516.)
2. 人間は感情という非論理的な力によって駆り立てられるのであるから、その行動は本質的に非論理的である。(§ 161, § 797.)
3. 人間はそのような論理的内実を持たない行動に論理的外観を与えようとする。(§ 180, § 447.)
4. ゆえに人間行動を真に理解するためには、これらの非論理的行為を覆っている(イデオロギッシュな)ヴェールを剥ぎ取り、その背後に潜む原理を把握せねばならない。(§ 249, § 251.)
5. 非論理的行為は「A: 心的状態」「B: 行動」「C: 心的状態の言語的表象」から成る。(§ 162.)
6. 人間行為を理解するためには、われわれを行動に駆り立てる真の要因であると考えられる「A: 心的状態」を把握せねばならない。だが他者の「心的状態」を直接に知ることは不可能なので、その「言語的表象」を分析してこれを間接的に推定する。(§ 169.)
7. この「C: 心的状態の言語的表象」は「派生体」と呼ばれる。派生体は相対的に恒常的な要素である「残基」と可変的な要素である「派生」から成る。前者は人間行動や感情の一般の傾向性とも言うべきもので、後者はそれを正当化し合理化する論理的推論や詭弁的推論を意味する。(§ 798-803, § 868, § 960f.)
8. 残基と派生を抽出する手順は次の通りである。まず非論理的行為から「行動」を取り除き、非

論理的行為に含まれる言語的表象のみを分離する。次にこの言語的表象から論理-実験的規準と一致するものを取り除く。そして最後に残った要素を不変的な要素(残基)と可変的な要素(派生)に分離する。(§ 798.)

9. こうして獲得された残基を、今度は逆に現実の行為に適用することで、それらの行為がどのような種類の行為であるかが理解される。(§ 1690)

III パレート行為理論再考

パレートの行為理論に関する以上の分析と要約によって、ある程度、主要な概念と基本的戦略の概要が明らかになったことと思う。最後に以上の議論を踏まえ、パレートの行為理論が有する理論的射程について検討することにしよう。

パレートの行為理論に内在する分析視角

a) 知識社会学的分析

繰り返して述べてきたように、パレートが非論理的行為に焦点を定め、その分析と取り組んだのは、行為からイデオロギッシュなヴェールを剥ぎ取り、その真の動因を把握するためであった。松嶋が指摘するように「経済学においては、彼は人々の現実の<意識>を所与の出発点として研究を始めることができた。が、社会学においてはこの現実の<意識>から出発するわけにはゆかなかった」のである。⁴⁸⁾

パレートの非論理的行為の分析に、人間行為の非論理性を告発する意図がほとんど含まれていないのは明らかであろう。彼は「人間行動は社会秩序を意識的かつ合理的に変化させてしまうほどに、徹底して非合理的で」あり、ゆえにわれわれの脆弱な努力によってはいかんともしがたいことを嘆いてみせるだけではない。⁴⁹⁾むしろ彼は人間行為の非論理性の効用を十分に認め、⁵⁰⁾ その理解

48) 松嶋、前掲書、327頁。

49) Zaitlin, I. M., *Ideology and the Development of Sociological Theory*, Prentice-Hall, Inc., 1968, p. 180.

50) この点に関するアロンの分析は興味深い。彼は非論理的行為の効用について、パレートの思考にそって次のような議論を展開する。社会秩序は本質的に個人が集合体の利益のために自らの利益を犠牲にするという非論理的行為によって可能となる。例えば人が盗みを働いたり、他人を欺いたりすることは集合体の秩序を乱し、社会に対する人々の信頼を低下させ、最終的には本人の日常生活にさまざまな不利益を及ぼすだろう。だが少なくとも短

なくして社会的事象の十全な理解はありえないものと観念し、真正面から非論理的行為の分析に取り組んだのであった。その戦略は知識社会学的分析とも呼ばれるべきものであり、論理的行為としての内実をもたないにもかかわらず、あたかも論理的行為であるかのように見せかける疑似論理的行為からその論理的粉飾(派生)を剥ぎ取り、その後に残された恒常的要素(残基)によって社会の形態と変動を説明するという、当時としては非常に斬新なものであった。多くの人々によって指摘されているように、それは思想史的な観点からすれば、「人間行動の合理化によって社会がより良い方向へ変革されるという<愚かな十九世紀>の啓蒙主義を反証しようとする試み」であるのかもしれない。⁵¹⁾ さらにまた別の視点からすれば、それは人間の行動や言説に関する表面的な動機や意味づけの背後に潜む真のまたは深層の動機や意味を暴露しようとするマルクス、ニーチェ、フロイトに遡るところの知的運動のひとつとして位置づけられるかもしれない。⁵²⁾

パレートの方法が知識社会学的志向を有していることは、残基と派生の理論が当時の読者の憤激を買ったことから間接的に証明されよう。フロイントが言うように、「自己の信念や論理をエセ論理と決めつけられ、本心はこうだとイデオロギー性を暴露されたのでは誰しも内心おだやかでない」。⁵³⁾ だが彼の著作を知識社会学の書として読む時、われわれは次の点に注意せねばならない。それは彼の直接的な関心が、人々の言説をその深層の意識と関係づけることによって相対化し、それによって自明化した意味世界を活性化することにあるのではなく、それらの意識の構造とそれらを正当化し受容させるテクニックそのものを明らかにすることにあったということである。その結果、彼の分析は残基の不変性に基づく人間

の不変性を、さらには歴史的事象の不変性を示すに終わってしまったのである。

b) 機能主義的分析

それでは次にパレートによる非論理的行為の定式化に基づき、そこに内在するパースペクティブを引き出してみることにしよう。

まず第二種の実論的行為であるが、定義によればそれは主観的目的、すなわちその適合性が科学的に検証されえない手段と目的の因果連鎖を含んでいる行為である。そしてその因果連鎖は、まことしやかな形而上学的・イデオロギー的理論で粉飾され、合理化されることが常態であると考えられた。そこでそれらの言説を唱道者の利害関心と関係づけ、そのイデオロギー性を暴くことによって相対化するという知識社会学的分析が可能となる。この分析がパレート社会学の核心であることは繰り返す述べた通りである。

次に第三種の実論的行為については、それらが客観的目的、すなわち第三者の観点からその適合性を科学的に検証できる目的-手段関係を含んでいるがゆえに、行為者本人が気づいていない行為の目的、すなわち「潜在的機能」を指摘するという R. K. マートン流の「機能分析」が可能となる。例えばパレート自身が挙げているヘシオドスの教訓の事例は、潜在機能の分析そのものと言って良い。パレートによればヘシオドスの「海や泉に注ぐ川の河口で小便をするな...。そこで便器を空にするな」という教訓は、単にそのような行為が望ましくないと感じるがゆえに禁止するのであり、それによって何か不都合な結果が生じるといった因果連鎖は主観的にも客観的にも想定されていないという点で、第一種の実論的行為であると判断される。ところがヘシオドスは知らなかったが、この教訓は飲料水を取る河川を清浄に

期的に見れば、この間接的な不利益は上述のような違法行為によって得られる直接的利益よりも遙かに小さい。従ってもし人々が論理的に行為するならば、必然的に逸脱行為が選択されるはずである。ところが現実はそのようではない。アロンによればその究極的な原因は「人々が論理ではなく情念や感情によって行為する」ことに求められる。「社会が存続しうような仕方では個人を行為させるものこそ、まさしく彼らの情念や感情にほかならない。換言すれば、社会は人間行動が非論理的であるがゆえに存続する」というわけである (Aron, R., op. cit., 邦訳、221頁)。

51) Aron, R., *ibid.* 邦訳、220頁。Zaitlin, I. M., *op. cit.*, p. 159.

52) Aron, R., *ibid.* 邦訳、233頁。Freund, J., *op. cit.*, 邦訳、7頁。

53) Freund, J., *ibid.*, 邦訳、112頁。

保つことで、ある種の病気の感染を防ぐという客観的目的をもっていただけると考えられる。このように解釈するならば、この教訓は本人は意識していないが、第三者から見れば明らかに検証可能な目的—手段の因果連関が存在する第三種の非論理的行為とみなすことができると主張される。⁵⁴⁾

最後に第四種の非論理的行為であるが、すでに述べた通り、この行為が非論理的であると判断されるのは、行為者がある手段を遂行することによって成就されると予想した事態と、実際に生じた結果とが一致しないためであり、この不一致は行為者が、彼の遂行した手段が生じさせる総波及効果を正確に把握しえないことに起因すると考えられたのであった。この分析はいわゆる「予期せざる結果」の分析そのものとなる。もちろんパレートはこの種の分析に際し、ある手段の遂行が、皮肉にも当初意図していた事態とはまったく逆の結果を生み出してしまおうという、いわゆる「行為のパラドックス」を射程に入れていたわけではない。しかし彼が挙げる事例の分析から、少なくともシステムの構成要素が生じさせる総波及効果を把握しえない人間が犯す、「必然的な愚行」についての明敏な洞察を看取することは可能であろう。

結語

本稿の執筆に取りかかる前、筆者は次のような構想を抱いていた。ひとつはパレートの『社会学大綱』の基本構造を明確に呈示すること。二つ目に「行為の非論理性」を軸に据えるパレートの行為理論を描き出すこと。そして最後にそれを「行為の合理性」をキーコンセプトとするウェーバーおよびパーソンズのそれと比較し、その特徴と意義を明らかにすることであった。だが結局どれひとつとして満足に達成することができなかった。最大の原因は約一年間かかりきりで読んだにもかかわらず、1800頁にのぼる本書の、特に後半部分を十分に読み込めなかったことにある。その結果、パレート行為理論のもう一つの核である「残基と派生」についての検討を十分になしえないま

まの執筆となり、いたしかたなく「非論理的行為」にのみ焦点を当てることになってしまった。本稿で明らかにした通り、両者は密接に関連しており、どちらかを欠いたパレートの行為理論は成立しない。しかしながら筆者の力不足によっていさかかまとまりのない論文となってしまったものの、部分的には適切な要約と解釈ができたのではないかと自負している。パレート社会学の総体的解釈は次の論文の課題としたい。

参考文献

- Aron, R., *Main Currents in Sociological Thought II*, Basic Books Inc., 1967.レイモン・アロン『社会学的思想の流れII』北川隆吉・宮島喬・川崎嘉元・帯刀治訳、法政大学出版局、1984年。
- Barber, B., *L. J. Henderson On The Social System: Selected Writings*, Edited and with an Introduction by Bernard Barber, The University of Chicago Press, 1975.
- Bernes, H. E. and Becker, H., *Social Thought from Lore to Sciences*, Harren Press, Washington, 1952, Vol. II, Chap. XXV: "Sociology in Italy. The Marx of Fascism : Pareto".
- Bellamy, R., *Modern Italian Social Theory : Ideology and Politics from Pareto to the Present*, Cambridge : Polity Press in association with Blackwell, 1987.
- Blaug, Mark (ed.), *Vilfredo Pareto (1848-1923)* Aldershot, Hants GU11 3HR, England : Brookfield, Vermont., U.S.A. : Elgar Publishing Company, 1992.
- Bousquet, G. H., *The Work of Vilfredo Pareto*, Sociological Press, Minneapolis, 1928.
- Creedy, F., "Residues and Derivations in Three Articles on Pareto," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1, no. 2, pp. 175-179.
- Croce, B., "The Validity of Pareto's Theories," *The Saturday Review of Literature*, Vol. XII, No. 4, May 25, 1935, pp. 12-13.
- Eisermann, G., *Max Weber und Vilfredo Pareto*, Tübingen : Mohr, 1989.
- Freund, J., *PARETO, la théorie de l'équilibre*, Seghers, Paris, 1974.『パレート均衡理論』小口信吉 板倉達文訳、文化書房博文社、1991年。
- Ginsberg, M., "Pareto's General Sociology," *The Sociological Review*, XXVIII, 3, July 1936, pp. 221-

54) Pareto, V., op. cit., § 154.

245.
 ———, *Reason and Unreason in Society*; William Heinemann Ltd, 1947, Chao. IV: "The Sociology of Pareto."
- Henderson, L. J., *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1937. L. J. ヘンダーソン『組織行動論の基礎 パレートの一般社会学』組織行動研究会訳、東洋書店、1975年。
- , *Sociology 23 Lectures*, 1941-42 edition, previously unpublished.
- , "Pareto's Science of Society," *Saturday Review of Literature* 25 May 1935, pp. 3-4, 10.
- , "What is Social Progress?" *Proceedings of the American Academy of Art and Sciences* 73 (1941): pp. 457-463.
- Heyl, B. S., "The Harvard Pareto Circle," *Journal of History Behavioral Sciences*, Vol. IV, No. IV, Oct., 1968.
- Homans, G. C. and Curtis, Charles P., *An Introduction to Pareto. His Sociology*, Knopf, New York, 1934.
- Hughes, H. S., *Consciousness and Society*, Alfred A. Knopf, Inc., New York. 1958. 生松敬三 荒川幾男訳『意識と社会』みすず書房、1970年。
- Lopreato, J., *Vilfredo Pareto*, Thomas Y. Crowell Company, 1965.
- McDougall, W., "Pareto as a Psychologist," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1, no. 1, pp. 36-52.
- Pareto, V., *Trattato di Sociologia Generale*: G. Barbéra, 1916. 『社会学大綱』北川隆吉 廣田明 板倉達文訳、青木書店、1987年。 *The Mind and Society. A Treatise on General Sociology.*, Translated by Andrew Bongiorno and Arthur Livingston, 1935.
- Parry, G., *Political Elites*, George Allen & Unwin Ltd, 1969. G. パリティ『政治エリート』中久朗他訳、世界思想社、1982年。
- Parsons, T., "Review of Mind and Society by V. Pareto and Pareto's General Sociology by L. J. Henderson," *American Economic Review*, Vol. XXV. 1935, PP. 502-508.
- , "Pareto's Central Analytical Scheme," *Journal of Social Philosophy*. Vol. I. 3, pp. 244-246, 1936.
- , *The Structure of Social Action*, McGraw-Hill ed. 1937. T. パーソンズ『社会的行為の構造』稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳、木鐸社、1976~1989年。
- , "The Present Position and Prospects of Systematic Theory in Sociology," in Gurvitch, G. and Moore, W. (eds), *Twentieth Century Sociology*, New York: Philosophical Library, 1945., reprinted in *Essays in Sociological Theory*.
- , *Essays in Sociological Theory*, The Free Press, 1949.
- , *The Social System*, The Free Press, 1951. T. パーソンズ『社会体系論』佐藤勉訳、青木書店、1974年。
- , *Toward a General Theory of Action*, editor and contributor with Edward A. Shils and Edward C. Tolman, Gordon W. Allport, Clyde Kluckhohn, Henry A. Murray, Robert R. Sears, Richard C. Sheldon, Samuel A. Stouffer, Harvard University Press, 1951. T. パーソンズ『行為の総合理論を目指して』永井道雄・作田啓一・橋本真訳、日本評論社、1960年。
- , "General Theory in Sociology," in Merton, R. K., Broom, L. and Cottrell, L. S., Jr, (eds.), *Sociology Today*, New York Basic Books, 1958.
- , "An Approach to Psychological Theory in terms of the Theory of Action," Koch Sigmund (eds), *PSYCHOLOGY*, 1959.
- , "PARETO, VILFREDO: Contribution to Sociology," in D. L. Sills (ed.), *International Encyclopedia of Social Sciences*, New York, Macmillan, 1968, Vol. XI, pp. 411-415.
- , *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, The Free Press, 1977. T. パーソンズ『社会体系と行為理論の展開』田野崎昭夫監訳、誠心書房、1992年。
- , *Action Theory and the Human Condition*. The Free Press, 1978.
- Powers, C. H., *Vilfredo Pareto*, Sage Publications, 1987.
- Russett, C. E., *The Concept of Equilibrium in American Social Thought*, New Haven: York University Press, 1966.
- Sorokin, P., *Contemporary Sociological Theories*, Harper & Brothers, New York and London, 1928.
- Schumpeter, J. A., "Vifredo Pareto (1848-1923)," *The Quarterly Journal of Economics*; LVIII, 2, May 1949, pp. 147-173.
- Schutz, A., *Collected Papers II*, Martinus Nijhoff, 1964.
- Sica, A., *Weber, Irrationality and Social Order*, Berkeley: University of California Press, 1988.
- Stark, W., "In Serch of the Ture Pareto," *The British Journal of Sociology*, XIV, 2, June, 1963, pp. 103-13.

- Weber M., *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1, Vorbemerkung. 1921. M. ウェーバー『宗教社会学論集』大塚久雄 生松敬三訳、みすず書房、1973年。
- Zaitlin, I.M., *Ideology and the Development of Sociological Theory*, Prentice-Hall, Inc., 1968. I. M. ザイトリン「ヴィルフレッド・パレート(I)(II)(III)」山田隆夫訳、阪南論集、人文自然科学編。第18巻、2号、3号、1982-1983年。
- 赤坂真人「社会システム論の系譜(IV)—ヘンダーソンとパーソンズ；パレートの方法論をめぐって—」関西学院大学社会学部紀要、第73号、1995年。
- 新睦人・中野秀一郎『社会システムの考え方』友斐閣選書、1982年。
- 池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書、1984年。
- 佐藤茂行『イデオロギーと神話 パレートの社会科学論』木鐸社、1993年。
- 新明正道『社会学的機能主義』誠信書房、1967年。
——『現代知識社会学論』巖松堂書店、1935年。
- 高城和義『パーソンズの理論体系』日本評論社、1986年。
——『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店、1992年。
- 富永健一『現代の社会学者』講談社学術文庫、1993年。
- 日向寺純雄「パレート社会学とイタリア財政社会学」青山経済論集、第34巻3号、1-23頁、1982年。
- 松嶋敦茂『経済から社会へ—パレートの生涯と思想—』みすず書房、1985年。
- 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981年。
——『文化のフェティシズム』勁草書房1984年。
- 森島通夫『思想としての近代経済学』岩波書店1994年。